





俳諧十家類題集雜之部

○目錄

神祇 親教 法樂 後文三 賀祝 六 戀 八

餞別 別 別 別 送別 十 紀行 旅泊 罷後 十三 名所

地名 旧跡 十八 取思 共 懷 旧 懷古 共 六 述懷 共 八 贈答

後撰 共 五 画讚 甲 詩 文 詞 和 考 甲 五 雜題 共 事 甲 八

祈禱 甲 八 每常 甲 九 追善 悼 辛 雜題 每季

題發句 迴文 在 一

佛門十家類題集雜之部

神祇

八千坊 輯校

外河やふりもかきけに聚像 芭蕉

信子さる子のーくやちり梅のま

らさるるに皆押公ぬ所遷宮

那う夏の名居又まもたうり

宮人よ我名をりせそる

つたふもふもぬし知るいがさ升 沾徳

多士持段

大酢若命

八十年の
聖廟

松は月入時お風お免るる自然
言水

修永元奉幣使

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

三徳奉納

其角

雜

内宮
三徳奉納

文の好い 高きもまゝ 神 終山

三徳奉納

家々のぬき居よきと 大 社

三徳奉納

不編海巾 編 存よむ 出 洗 湯

春日法樂

神の縁 渡 匂ハ 携 ともり うちり

三徳奉納

と 幾 日 秋の 取 借を ことごとく 山

三徳奉納

守 持の 存 び ことごとく 神 光 燦

三徳奉納

梅 ね や けつ びる 秋 八 石 所

三徳奉納

空 永 開 元 奉 幣 使 御 代 奉 の 人 の 衣 之

三徳奉納

た きて 仔 孫 と 終 り 衣 之

元禄十四年二月廿五日 聖廟八百餘御年忌
於龜戸御社詩歌連信令與行一座

十八の町井はゆふとくくく
井させしかつるもとあり山の裏
其角
嵐雪

信濃催馬樂

君本はいれぬを人行はのまはぬ
うきと持取て

新まゝ一さしかぬ井ふう園の中ま
らんまに信じて思本のもろ居り地
希因

それとくそひまの松まのちまうの地
井田まの報うつま松まのちまうの地
まことくくく大らんを成すつらまのれ
嵐雪

在お天神
奉納

註二

山まふふ
くし折ひつきて大下まありのまうら
其角

北野法系
新向の折引をまうらまうら
希因

住吉奉納
清の折杭ま接くもて幾まを
来山

神明奉納
ふまのなれまいさねを雪と味
、

住吉奉納
休しと相む時くまのちまうら
、

住吉奉納
まの白ふえよま松のまの雪
、

住吉奉納
かまうらな平坂すてもまうら海の上
、

住吉奉納
本るくくく松まのままうら
、
麦林

住吉奉納
出代まの井もうらまはらる
、

住吉奉納

妙法山

石をふるも二百枚の銘や五十鈴川 麦林

香良例

深貝も吹中し千粒の神の秋

伊勢

きり中扇しきりる様かきゆ 希因

の尺教

法樂 經文

古き中修植持し一本 芭蕉

え福己のせし大佛再建

和名中つら大佛のそららと

山海程

貧山のそまふりきりし

三井晚鐘

れ後しし懐ひ抱ゆるれのよ 治徳

悉是吾子の
こころ成

似我皆ししきりぬるるれは法持

神力品
現大神力

嚴霜院殿の大法事成東叡山のおとまり

又月日のまも体じつ法のしと 其角

法のまれまらるる中をな成叩く者

正月己巳布晚の年方天、

信修の奉酒

お模るるゆりてんてん布極筆

佛より大海日入滅し終るる

佛もとらんやてんてんかたるるはせれあ

まては生もふのそららるる

佛とて模りのまら月あつる

信子也る新寺念佛堂

こ人のまらにこころよ秋のそと

身合羽の依りや復た言ふに 其角

大慈心院のよま成るなりて

灌頂の園よりあてこらしめ

空をにこめぬく際のはかり

手よきき修るまきぬくはひま

三列の酒井村観音奉納

ぬき心輪や解もかゝるはかり

廣詞止觀又一目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目也

ちをよまきこし獨りけり

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して貪欲を志しけり

得正觀

也極極始雜況後極苦のみの

為瘡のいゆるめけり 其角

如是果のくはを

こころこみひろくし栗のら

授記品無有魔事

くりりしうぬらて彼存の夕日

南京茶沙寺の臨言よき

涼風巾眼溝くまの茶沙も 言水

和智武能のる語本をより一里彼武能の月れきりて極るは

柄のさけき後やうまつり 嵐雪

南無大悲觀世音菩薩

連

素衣のやうなとりの老女は

嵐雪

芭蕉の墓の傍の法師の墓の中

任持して掛ひ果たりて

草拵上人の岩室

蒸のころりたるの

穂五本やまにさけるは

目黒の河と人のこゝろ

底きつゝ人のさき

能 燈 煮るさうさうもふ

特五

法花をやつて

はとらんとおんもつゝぬ火爐が 嵐雪

歸依法肉道の菜を冷め

飯のやうな飯をえさるゝ

我等今日聞佛音教觀喜踊躍

と讀誦しなす

咳つゝの念佛のつら

一切衆生悉有佛性

空人の所かくさのやう

まきさるゝ一里眉毛は秋の峰

妙義山

蕪村

うね山
千人堂

木食堂

陀柳

百合もその娘とらふまはるるを 麦林

たふん表も栗も密柑も玉の時

我月も柳と見え涼しはよ

賀

宅賀

その養

貞佐宅

よきおや雀も信るる背戸の燈 芭蕉

鶉啼や赤子の頬を吸時ふ 其角

けし初を法師もまはりて枝の露

梅津氏の祖父古坂表の室初はしる

持云

御感状 御太刀成り哉せしる正月

十七日の朝も中佐井上枝除候

の夜後十七人さきも二月十七日の

そまらりし

藩将を文彦編や梅の末 其角

悪の家のふりもくさぬ梅もさ

塔も一宿の秋乃嵐より 素堂

信所のまふふははるる

ふきの草をぬたなりや梅咲 未山

ハナハの葉 梅のさきて月もいりさき一売の松 蕪村

利斐

たんやや 落もまをまの乳 芭蕉

幼午の乳のそりし ちかぬが

先脱へ梅成る 後のふらり

たろふの皮は梅の跡にみり 其角

脱履言

かまを移してす ちかぬが

かま履し ちかぬがの跡に

衆嵐入懐のそりし

引はきく ちかぬがの乳

午の年午の月午の日午の時

うきん令

競る時入脱身のいさそり

漸氏加々敷

ちかぬがの外ふらり 坂高し 来山

ちかぬがの珠喰あそり 人の白は

あそり梅のつちや 貝の玉 其角

ちかぬがのちかぬがのちかぬが 嵐雪

梅後の乳

ちかぬがのちかぬが

ちかぬがのちかぬがのちかぬが

ト居と後

ちかぬがのちかぬがのちかぬが 蕪村

戀心

うらみ

恋心

名原

似せよ
かきうて

待心

契不違心

海よりよきとてはきりたはらぬ

うつたふもくもあはれのきり減り

雲の移るもくもくもあはれは

身をおりんといふもくもあはれ

我もよきとてはきりたはらぬ

よめ人をたよきとてはきりたはらぬ

園の灯よきとてはきりたはらぬ

花よきとてはきりたはらぬ

芭蕉

治徳

言水

其角

雜

おぼろ

井筒やう
橋ふらり

待心

聖園汽

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

おぼろの光やけりてはらぬ

来山

其角

ま君を懐

二挺の
帰心

ま君を懐

ま君を懐

嵐雪

依りて本所難おふて世を
し

川流して来る水もあつた月も

あつた月もあつた月もあつた

月もあつた月もあつた月も

あつた月もあつた月もあつた

月もあつた月もあつた月も

あつた月もあつた月もあつた

嵐雪

麦林

希因

来山

希因

希因

高京

傾塔傳

希因

九

錢別

別 錢 送

梅の葉よりこの世のさうけ 芭蕉

むくむく雪のふりまのまをひく 素堂

お高のねほよふらふらまぬん 沾徳

夕干はらけさくしぬ川を越る人 其角

お高のねほよふらふらまぬん 其角

葉の蝶をまきんすの上 其角

芳刈のうらぐれ冷せておのれ 其角

うらぐれ冷せておのれ 其角

芭蕉

素堂

沾徳

其角

其角

其角

其角

七つ考

又考々を花のころもやうに

ふ川の雲よ入らぬもさういふれり

比ん持さよふよふさ一具

さうむけのう白成るを金れて

そのおぼろのうらにえ

あるはつと平涼と雲と知られり

岸金おんをよと平一物

涼とささのそらや連と金

葉と花と友成さ葉の便り一擲とて

活活と味又違ふ一て何別の句

なまを眼むらう一やうに

おぼろやあつたむもは序

中村やあつたむもは序

山も人もさういふやむ旅事

後府仙石玉葉の法加書と銘別

寂とて一傘とて一昔新

芭蕉翁をよとて

あつたむもは序とて

極月十の雨とて

つらとて一葉とて

湖舟録海くくく

舟の船のそくくくくくく 其角

船久松浦山

昔秋より浪をよかろ下涼

船より合

古く梅あり入きよくくく 嵐

移よくくくの中にも晴れし 嵐雪

船成修多

そくくくくくくくくくく 来山

そくくくくくくくくくく

そくくくくくくくくくく

昔秋よりくくくくくく

竹溪修多

そくくくくくくくくくく 蕪村

る別

庭よりくくくくくく 芭蕉

物事くくくくくくくく

経別

ちくくくくくくくくく

春風のそくくくくく 嵐雪

難ははをくくくくくく

のせくくくくくく

我くくくくくくくく 言水

舟より

本よりくくくくくく 蕪村

舟一決

又舟船よりくくく 素堂

又出くくくくくく

行 終や久して又 暮るもけり 秋の夜 始 徳

丹波たふかしのつゆのゆり

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

泰皇の御心を

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

位下向
仕官の
は

紀行

旅泊 野旅

旅宿

九つひの月夜のつゆのゆり 色 蕉

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

其 丹波たふかしのつゆのゆり 其 角

和歌

何の情	友の目やとみんて嵐のいまひう	嵐雪
山中温泉	かひりてき幕のいなるや無のき	希岡
伴走山中	さのうけしきまの道はくはく	
大和指	短あや人あや余ふ大和指	麦林
新橋二	このふけうらそなふれ秋のき	
西行谷	尾まのふまをこるまうしきり峰	
伴以山	ま解の系図さまのり伴以山	
八坂	あまきんききもはぬさのほろや	
朝熊	吹てれさのりきや帆うさ舟	
鼓う岳	ほろきんきんきや心も表表	

舟捨山	まふれや草捨山のけりし	
加太藤系	こまの又まの藤もまうしきり	
三橋	こまの橋のまうしきり	
三橋	そまの橋のまうしきり	
風来寺	そまの橋のまうしきり	
青光池	そまの橋のまうしきり	
そま	そまの橋のまうしきり	
橋泊	そまの橋のまうしきり	
一見の	そまの橋のまうしきり	
右指	そまの橋のまうしきり	
三五	そまの橋のまうしきり	
橋泊	そまの橋のまうしきり	

下戸の女よはむと池田の月夜

芭蕉

山崎の

まじりてさすけの夜ふたの露の

ついで

春の山にん月て娘のついで

果ては満ち入るる月の上り

夜のはる月のあちる旭の

ついで

まじりてさすけの夜ふたの露の

ふらまはるの満ちる月夜

まじりてさすけの夜ふたの露の

素名の

蛤の園ふらさる月夜

送る

蛤の園ふらさる月夜

素堂の

まじりてさすけの夜ふたの露の

寺陸の

まじりてさすけの夜ふたの露の

指さる

まじりてさすけの夜ふたの露の

まじりてさすけの夜ふたの露の

其角

まじりてさすけの夜ふたの露の

まじりてさすけの夜ふたの露の

希因

まじりてさすけの夜ふたの露の

其角

まじりてさすけの夜ふたの露の

其角

まじりてさすけの夜ふたの露の

其角

まじりてさすけの夜ふたの露の

其角

桐葉屋	月のあそびあそびの田うらり	希因
旅屋	富士の雪を海屋に流す	其角
露屋	舟の旗あやうき	言水
二月十日	富士の嶽のたまえ	其角
系図	を流す尾を	
鳴り	汗流	来山
本橋山		
鳴り		

名所

地名 橋路

松新乃 ちりつちり月の名所

後漸中流よりいそぎおそ
 ころ月や峰のまはりし
 夕晴やけりしは涼むけり
 うさゆや井のまはる人の果
 大ひる平しけりてそ
 ころよまき初たぬ時
 侍や嬉ひたりは月の友
 系図のまはり西遊う合戦の
 三年ちの門をわらわら
 こころもあそび人やはけの

小倉山

お智恵

西橋

とよせの湖 高 旗 西りの夜更も出てもさるるは

高 旗 笛の音小波もよりの来るは

山崎宗澄 山崎 有るくはれはあつらん杜 芭蕉

極は池 極 有る輝のつぎよあのかまふり柳 希因

極余建中寺 家老の家 かつてはと月さるるるの鏡 沾徳

鳴戸にて 有る生 麻のきりや湯よきし山からし 来山

有る生 有る生 人の歌うはししも果てはあやの月 希因

有る生 有る生 細きくぬきもいづれもやうとくさ 希因

所思

深川冬威 極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

極 有る波をすも橋水もあつらん 芭蕉

二
夕
返
店
目
得

又後をわ縁とて又も六原の奴
としかくもさしとて中雪の結屋系
そのひらく断き軽き我世は
るるり〜我を陰ふらん枯の茶
武士の大相若とて唯、り、那、
よきさきの備とれといふなり
は角や〜も尻を張色おなれ酒
瓶破く〜おの〜はりの、あつてま
さ〜とあぬま〜のさ〜とらに
つゝとあぬま〜のさ〜とらに

いせ又ま、
巻五

芭蕉庵記

松平屋
孫兵衛

大付初月
日心うそで

流原老

月さひよ明かりまあの街さ
あかしてた〜はるぶすあつて
をやく〜と断きをさす〜と
そと記述も松とらカ、り、那、
その〜の〜はぬるや新の栗
か将のつ子れをれしやまかしの雪
梅ふ〜さの〜はやたをぬ〜は
そよぬもさ〜と宗祇のや〜は、
まら〜と友成今〜月月のち
は宗のちの月やそのす、い、と坊

和角夢屋

物語自白

自向自答

禪忌慶界

とせ成はる

酒 福

ふ 郊系

折之殺生
偷盜あり

んもくそぬまや 後のう〜十あ 芭蕉

朝顔よふあう 後う入男、う非

ふ又持入地まうらひそ友 雀

秋十とせ却ていふをさひら扇

以秋らなるんて幸あうまうなる

稲妻よはれぬ人のさうこはよ

はひやうりか又侍さるはははは

高のまふも酒香きまふも二 西 其角

うそまふも中か返つてあう弱穢

うこたうらふもあふも戒の権りる

鑑素堂
秋池

風秋のうらまふ 一 庵をく、ららり

秋もいふ書 後まてん〜上ま

長崎のうらまふもまま真のふ〜まう

あ〜

抑のま秋後の懸結 不 言

あゆや〜あゆみのあふも不縁貴

罷又、渡るまのよ不ひ、う那 蕪村

白心作
中を美人改らぬの中はゆらうら不吟
其の月改らにそのあうら〜えうら 其角

針三平高
堂

あふあ

其角

自得
相生

吾心よりりし骸骨なる秋の赤
蝶を鑑つる子橋を越る人の形
まゝのまゝの狂うゝ蝶の折るを
下をまゝの狂うゝ蝶の折るを
五月のまゝの我をまゝのや母を
まゝのまゝの狂うゝ蝶

嵐雪

亡母
を
まゝ

まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶

まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶
まゝのまゝの狂うゝ蝶

其角

平石の表
成

其角

嵐雪

壬生

辰
辰
辰

信
東
山

川骨のまゝの狂うゝ蝶
柳梅のまゝの狂うゝ蝶
新雪のまゝの狂うゝ蝶
十月のまゝの狂うゝ蝶
辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰

麦林

辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰

辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰

辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰

辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰
辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰
辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰
辰辰辰辰辰辰辰辰辰辰

来山

儂くし終くしし杯のよみ茶氣味はら

其角

四十よきふりして死んてそめははれ

蕪村

つらふふふかふふあふふふ〜

花先とくふく獲そ秋あふつ〜

新もつ碎るや山嵐哉〜

月とくもつちほ〜

持もあふ〜

廿〜

恨〜

龍 七五

十六年
小正月

懐かき持もあふ〜

何〜

月〜

痛〜

〜

魂〜

洞〜

〜

〜

憶自他

其角

来

こころ

こころのちかて抱たあまうとやたけり 来山

懐舊

懐古

芭蕉居士の四徳成徳

志を成りしあはれりあまうとやたけり 素堂

後醍醐天皇

法皇御年終りしあまうとやたけり 芭蕉

伊賀上野

玄冥をせりしあまうとやたけり 其角

能其

曲神年と幼はるるあまうとやたけり

あまうとやたけり

あまうとやたけり

貞正を懐く

あまうとやたけり

あまうとやたけり 嵐雪

あまうとやたけり

あまうとやたけり

あまうとやたけり

あまうとやたけり

古田社を

しつゝしつれ中よきもけりけし感 嵐雪

むらんやま甲の下れまうしん 芭蕉

余をけりもも楠ありて太 素堂

懐古

えけや兵士ともうまのりや 芭蕉

七年のまもりまうけりまもり 来山

古人移舟をありし

よ来去後舟移りぬいし秋そ 蕪村

忠則古墳一樹のねよ侍まう

月と雪月およしつるる屋よりけ

清系とせ成産して

宗祇の殿

えらうしつめまのせもまうそ 嵐雪

迷懐

老楽

猿をとも月をまうぬ社の人へ 来山

ねうけをよけそ我身よ入るをり

身ひとつしよまもりしめれは月

るのゆきとらうしやえとるる月

贈答

挨拶

涼しと秋の風をうけて種まき

芭蕉

いさよひきしつまつらと秋の葉

隠居申す葉少く月とて田こら

ころりあそぶ木の葉も秋の葉

ふかやうの葉も秋の葉

まき若や玉葉とて秋の葉

大坂より人の葉も秋の葉

おのづから秋の葉のひらひら

新文

龍波人稱の秋を秋うて七人う白
をもちあふふと秋の葉を秋の葉
指つり送る秋の葉

年秋の指の秋の葉

其角

雲釋ふやうの秋の葉

芭蕉

園庭の秋の葉

日笠の秋の葉

藤の秋の葉

中つりし人の秋の葉

雪の秋の葉

心ま初會
憶為之客中

月代やし藤より夏成をそよみの高
裾折て果成はをまらん夢枕

芭蕉
嵐雪

梅七のえ

まのこやうのふる思をありし出せ
嘯をみよふきりく菊を海

来山

ふれ一様をいそいそとてきり
つぎいれちとまはしつことなり

やいよとよとよとよとよとよとよ

とよいよとよとよとよとよとよとよ

いよとよとよとよとよとよとよ

雜
共

案より
記す

おろしなよ木兔もけりけりなをなを
まことたらしむせらの川の船籠
暖簾のふきものをいよとよとよの梅
梅様子咲不見ん保良の里
懐かしきそを能く思ふとよとよの船籠
やいよとよとよとよとよとよとよとよ
西ふしとよとよとよとよとよとよとよ
涼しとよとよとよとよとよとよとよ
孫拾うとよとよとよとよとよとよとよ

其角
芭蕉
言水
南条研ら以丘を侍り

燈の炭の瘠もこそや おまじぬ 言水

糸洪門より一知上人借あてらぬ
以ぬ日の風後を燈の中よりぞ

と千余年一音都介の宗人成るぬ
壬午の年の閑るう時

旅風さよふまゝうらや 松梅

芭蕉行所まゝて久しぬらりし

ついでに小車とらん茶の羽織 素堂

とびつとくともれよ友の炭俵 其角

らひつとくの後たよみと命

新世世五

會 盟

と粟のうらなり 折角 被

交りのとて又よき料理

器の中より法をさのつとて

及相非よとてとてとて例して行

かゝのともやに女抱せしぬ 下巻

女まゝの合養せしや 凡 島

らつともあつともやとて

中のとくよあぬる養人けしと

任るうて西きつとて教化せし時

はるたのともやとて

護のよき二万石の糧にりたり 其角

冠里公備中松山初入の時

川上ら若やし酒の昔屋の種をり

汗濃とよ衣の背縫りゆきり

或人のふけりて

くさくさりやまひるまじく

行をぬらひては浴着のゆき

のひよりしよし けありて

眼息よあのみおきやうし

園のぬりさうまのゆき

山田返を

号新後

箱 卅六

芭蕉をとりて

きんや十日さても一回し

さまひさるるはどの梅平さ

梅いん山 園伽のちま

一月廿二日冠里

業刻との上をを振り

雪のふりまなり

めねやむつま

さるるは

おのり

らし

秋天和尚の中

夕顔よりつらき色紙のうらみの書

坊主小僧のうらみして人々小僧のうらみ

中へあはれ

坊主小僧のうらみ小僧のうらみ

色紙のうらみして

裏光のうらみしてうらみの書

孝悌のうらみしてうらみの書

秋葉集定の時

谷羽のうらみしてうらみの書

感徹和尚のうらみ

坊主小僧のうらみしてうらみの書

九月九日のうらみしてうらみの書

うらみのうらみしてうらみの書

二のうらみしてうらみの書

うらみのうらみしてうらみの書 希因

芭蕉のうらみ

うらみのうらみしてうらみの書 其角

うらみのうらみして

まゝ人のうらみして

多きよは竹兮のふやてはて 其角
切悠きうと

竹兮
竹をよと法余とてと教は汗

うらやうらやうと

山ろのちろくはなやあ月る 嵐雪

きんく
きんのふあや けこのあまうか雨

一 静きん教とて

あけく中 ぼくうと

味あさうよとて 後 鉢の 雛 那

人の世よ
ふすま

あまふあやとて 海をけあまうと

今てとく 旅るうりやまの梅 来山

あまうう 駒あまはるうと

秋風や 芳ふあまうと

流るの一本とて

解解て 芦あまのまうとん 蕪村

うきとあ 吹らうとて 花あら

幻住とて 咲きあ

暖茶せくとて

丸をよの持まむうとのまうと

改人 曉羞ぬく 东山 西野とみち
とらふ 時をわく 故きあひ

身とまじりて 梁の月け 嵐、那 燕村

或は其の
かゝる

古き庭より 茶釜をきく 枝、うな

东山の林下に 住むる

トまじりて 一言はけり 又、まじり

嵐をきく ぬきぬき 引合ふ 徒、まじり

かゝる
人うも

せまて こと人の 言に あり 来山

松葉を 編む 又、まじり

よむ 枝、まじり こと ちて ぬきぬき

雪の日の入りのこゝろ

しづかに ねむる こと ぬきぬき

画讚

又 鹽湯

糠 早中 焚りて ぬの ちまき 煎

中 馬宮 又 骸骨の 笛 こと かな

穢 事 あり ち ぬの ちまき 煎

ちまき 煎 こと かな

布 密 縫

ちまき 煎 こと かな

琴 後

ちまき 煎 こと かな

楠正成像 肝石心與人之情

梅子よかゝる 淡や 梅の露 芭蕉

紫白く 梅玉の露

清くも しく 紅く 人おのろ

善ぬ法阿弥

梅のさぬうきとて 氣にたうり 兼

梅柳 観音経

青柳のわさうら しく 玉とふ 兼

いり 光り しく 兼 柳の梅 兼

幼名や みるぬ 兼 の丸 既中

自画 讚
貞徳を像

新四十

竹日の画

竹青く 日赤く 兼 兼 兼 の 環 素堂

白き 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 其角

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼 兼

仲磨の画

國正の画

寒芝画

とらふふふふ十年や一息をか 其角

月ころちや一古成帆よましくとま山

ふふふふふふふふふふふふふふ

らふふふふふふふふふふふふふふ

芭蕉の自画十三様周之讚

師の坊の十年志をくし柿陰

浦嶋りたよりの暮るる路の夢

水相親の絵

ふふふふふふふふふふふふふふ

を舟ふふふふふの絵

大板画

傘おろく月よ後ふふふふふ

兵のひらくふふふふふの日記

姪女小むらふふふの絵

藤のふふふふふふふふふふふ

胸中の兵おふふふふの月

布袋の月を擲る絵

ふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

維摩の讚

舞や海のやねを垣根くま 其角

とまきくもまきくんかこひて又

軍路かこころりふまにこん

そやせ終く再くしこひて

涼風やま一そまよくゆはし

舟よ蜻の葉こまきし終よ

かよ舟のこころこハちあこそ

こ帆舟を遠庵よるころまあつま

山松海

拾得の風巾よかこむや玉帯

四睡の圖

かき終くよぬるも物くや虎の耳

舟のこまきくんかこひて又

こころの枝の輝きし終よ

月よも枝よはるまきこまき

青柳の歌の標やこくの月

遠やこつ終き葉を笑ゆや

乙子のまきくんかこひて又

清うよ終このまきくんかこひて

まよつせまゆや終くんかこひて

こころの枝の輝きし終よ

うまきこの曲さる枝を割きし

傾城の旗

柳遊園

雲葉の旗

接骨木

頼光山への後

小町後

たふくくさした風おとほすう山橋 嵐雪
我意よ月も鼻もなれたるのをも
相中ふようし神静や橋をくし
八幡を吊りの後

七子後

凡切てさしぬ翫のひうりし那
松本もも着けりし本くれゆるを 来山
陶弘景後

猿丸後

山中の相言中のふらうんを 燕村
我くくよと心をすくくや秋の言

武者後

あつちの
大の魚
無量
梅
流る柿またのやれ鳥のかし
ふのうらみの言より歌でねまの秋
志高はひとねるたふけ武蔵坊
うらひさやいさるる新の梅
ことなふまくやの凡くく女く飛

山中の東人の言

新の龜や青砥もさくぬ山橋

黄一隆の画の後

四五人よ月をくくく歌おとほす

老女の火をくくく歌

香屋
是画

小舟の炭白く火桶のいろは
濁るるもなほ色も伝ふる

蕪村
来山

詩文詞 未考

落木浮水

お若きときし 吳夫よ香燭をたけ
又持て香付なり 葉のふり
新てぬのも 梅の枝し 多別梅

芭蕉

園白 輔之沖前より 花交松と題

雜 四十五

空つとわ 梅のいろむ小舟系

何必逃杯走似雲出舟大何感

又とと

此帳をさるるも 色をけり

其角

酔ふ梅香の 舟人 梅白

手握蘭只含鶏古

ゆらゆらと 舟のいろも 色も

一片花飛減却春

ゆらゆら 舟人 後や 減却

蕪村

風入馬蹄柱

木の下ろ蹄のうせやとてとて 蕪村

琴心桃美人

妹の垣根さそせしその花咲ぬ

美うを焼てあう鶴成者う我河津 其角

逐歐陽公賦

愧りふれえよ舜なるを悟さる

酒債る者往知有人生七十

古来稀

行らるるん心年成會う酒債る

まららるるん塊をちちる韓退之

佛骨表

春色人間總未知

困るる大上るるるる室のむ先

焼うるる美うへ恨の柳しう形

前のをねねとさしや猿とるも 嵐雪

和心水推敲之句

ささくく時よとと月とささう梅れ門 其角

空る氷るおや憶憶かささう想成閉て

射者平変者勝

愧すよいつもよいつる時さう後

ま梅也しさるる顔よ又ひとし

詩經 標有梅

夜学感

妻驩詣

春色

芽含買
讀莊子

氷若く偃氣咽を潤せり

芭蕉

彼をち嵐をその傍に舞ひて

其角

みらるる世の極のちよあまの

色とよまらるるにありしうして

いって我七石の砂を築よる人

おがりの骨格をうしひの夕ぐれ

長唄の紀よゆまの教をうて

ふせとてりてりてふいし

おもしろくくんとをふ下に業揚が

紙の人のまを成をそく先度心

一箱 四十七

寂蓮

のうをぬのい含たり

雑つなえんやうちしを袖を拭

井苑のやとぬふたのきをうてし

こまうてふまのちる紙

出せ者のつりもあつしはくを

ふたふたのむよあふ

一巻もこほさぬる葉の氷より那

芭蕉

遍照海のうらみの枯木たれ

あまをよまらるるにありしうして

かゝのあけふはよあまをぬはあ

故事

おののぼくと極しき

衣文あまのりぬる終原の浪 来山

人間一生不醉不醒

昔の瀬中一年中の水たひ

いづのむき垣をみる

一やうくこゝろをいふ者の子孫のや 芭蕉

屏風よき庭の住はるは

迷ひよりのと住うたをよむる 其角

祈禱

帯カ小る都入道行をその海の

小袋ふんと風流のいふく下略

山吹中井子城流る鏡 扇 蕪村

中納言藤原卿於馬場及就馬

まけり直陳をよむる其

言末如鏡

乳をきこつせの柳城さそのけり 嵐雪

父のうつろひに一日はたかたか
 秋とて入りしうらさるるよき
 芭蕉翁病床
 其角

無常

芭蕉墓

墓よりふらけしうらさるる

其角

雜四九

癸酉八月廿九日の昼亡父葬その
 場を以て翁の態を懐て四半の起別
 成し家
 一徹又悼を本意も挽く
 化那中夜を以て骨を
 一とふらけしうらさるる
 嵐雪

追善 悼

芭蕉墓
 追善

むらさかやうらさるるかたかた
 其角

芭蕉翁
百廿三

其のむねよきやむらじけしや 其角

とを成るる善化の作言

臨海の怒り二十五年の西

かゝ年成なりし下

善化よりぬ白ひ流りてふたき 嵐雪

菜のらたや坊の度ゆく深ハミ

ややらよかきりて流りし

やうさの空を穴塔の敵ひと

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱 上略

雑五十

ふりよか〜社も〜人言

十月廿六日

十月を〜から〜の九上

四七の歌三物

木かじしゆの操も訓読の養と

十一月十日和月忌

流中又定々業ひ〜耐

え録し亥十月十日一月忌

多人の旅を魁えも弔豆

朝更一周忌

まろふくあひくうしつて一周忌 嵐雪

本報寺時年忌

日の光秋もよるら秋折一うな 希因

ましくあゆむいもあはれを暮るま 其角

東西法師のさうさうすさのさう

しきさうしてこころあつらえ

秋あつらひくさ成すもあつらえ 其村

風亭二絶七回忌等月秋忌

あつらひくさ成すもあつらえ 沾徳

まろふくあひくうしつて一周忌

二絶

雜 辛一

七いせもさうらひあひくうわあつらえ 其角

あつらひくさ成すもあつらえ 嵐雪

同風亭二絶七回忌

あつらひくさ成すもあつらえ 其角

其角母を悼

眉ひくくあひくうわあつらえ 沾徳

青流亡妻を悼

圓女とらうらわあひくうわあつらえ 其角

芭蕉翁十三回

尾巻中風尾のすけをあつらえ

糸の端をよろろる木魚抄 嵐雪

西菊十七田舎巻石

秋の蚊の吸けく石や一むし 言水

そと角の母を悼

まらさや河原の花の咲つ人 芭蕉

口元悼

富嶺よりけしめれえ塚の草叶

少年成美つる人のあはれ

埋たもさ色中洞の意る音

一葉の心む

塚もろくけの秋の風

吾も返善

樽も賣あまらのたの飯とえる 嵐雪

雜 年二

鈴の偈を連ぶるときにめ 阿茶

吾も返善

啼いしとるもなれとる時

悼少長

形とてや 蓮葉の中よりとる梅 素堂

ト海追悼

吾我の信とるの年一の巻 言水

鳥丸五相の粘場の風とる巻

そと角の母を悼

久福四のときとる巻

かくも 経ひとる巻

経を結して

其成ふべく 持場の風と 忠徳

其のさうれは 後さうもさうれ

さうもさうれ

稲妻や ありふるとも 其角

蚊子もさうれを 悼

折新よかほらや 結る秋の世

以人よ二百十日を いらさうれ

危難も糸成さうもさうれ

宝永三年十一月廿二日 好身重女

其角

悼朝豊
吉田氏

湖春を
とむ

雲のちろとぬらぬら 綴られ

泣く涙を人さうもさうれ

芭蕉の風葉を 悼さうれ

嵐の葉も 孤愁をさうれ

草のこも 芭蕉の秋を力う

後世の義士 等をさうれ

あつたれ 涙をさうれ

悼後立志 初さうれ

昔のれ 初さうれ 其の妻

卯月八日 母をさうれ

身もろくそ衣もろくそ印月部 其角

この杜國例もろくそせたる

よと誠人よとやあはれ

着もむむかへて着ひて

えはきりてくれとさたつて

はらわさるむとて誠人のひて

羽ぬきもろくそ

七十余の老醫身ゆりてせたる

とてろくそとてかへてせたる

め白減をさるその老醫のひて

五九

そとろくそとてかへてせたる

人よとてろくそとてかへてせたる

とてろくそとてかへてせたる

六人むかふとてや又月部

柯求老人のむか

山系花や福をねてつるおき物

大町専法とて

洪のそとろくそとてかへてせたる

市川女牛追善とて九虎名成はて

とてろくそとてかへてせたる

塗敷の父をたゞしつゝ中経の身 其角
 仙石を敵守居正月よりよきさう
 孫ひぬ玉美らよは悔しと存
 不様やうて、子向の梅を悔えたり
 故赤穂城主淺野少府監長矩之
 舊臣大石内藏助等四十六人同
 志異体報亡君之讎今茲二月四
 官裁下令一時伏刃齋屍
 累世の仇は、はう黄舌はひそくし
 孫科をほくらぬく

妻 悼
 うらみさよひあま離れよこし
 尸のね 枯枝かきこつやまま
 万葉本ありらるや 母をなまこし
 悼青流亡妻
 物こふまあふこせぬのあまはる
 十葉のあつらひのあやうら
 弱ゆりのそとのそやし末のあ
 里右う娘失くさる
 鬼打のさよれまほむを致す
 心ゆくはらうてまゐるをあら

志述言

義仲寺師父の庵

もよほしもたふりきりては風

氷ふりてあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

待晋子

くまのこころに

年月し〜ふもあまのこころに

〜のこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

待晋子

嵐雪

米山

雑六十

ぬふり又のあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

義美の夜折つ〜時節部 蕪村

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

なほし〜ふもあまのこころに

晋子三十二回

悼家悔

播磨の又々こころや寺の表 蕪村

夢刈ぬ道及暮中せ法の杖 素山

秋の月相又暮ぬむろしを 素山

もはる舟よこしれをこころ

啼ふも人その悔の片想ひぬ

古は昔あるを悼生家の原

柔哉く身のみ向ふるよやま

雑題

吾妻又長題面白

廻文

吾妻

町々うこ幸ひるのぬらひこ那 芭蕉

於人のぬれ印とて火おこり 其角

蟻のこもる白りころぬもぬのこ 其角

十三弦国年又表して

岩のね個子揃ふてと年より 来山

出たり画の彩を凡し涙の娘 素堂

玉川のあなをわさるる

あ波の波にやとと入 其角

蝶のそと尾上の杉をさるれこ

鈴のこもる月を海と海の味

後之屋又稱之曰定者其戲也 其角
鬚のちお本絨のひとお枯るなり

漫成五倫

君臣有義

ぬのふもささくをささるるひも

父子有親

鈍けや情を娘ををれりし

夫婦有別

解くたをねと出ぬみささる

長幼有序

待 弟を娘のふもささるる

明友有信

天とを娘を娘をいへるささる

後者異邦の佛濫禪師十年

の景をしてふもささるる

牛もささるる娘をささるる及んぬ

なまささるる

尋牛 やそれおさよーあや一月おお

呼牛 ようこころあやれささるる

隠牛 なるおさるる娘をささるる

貧牛	二朱判やとねううも年男	其角
廻牛	小使もえよいらする又月、うま	
番牛	ちいさな夜傘をかきせたり	
無牛	さうくは枕も麻も子履も	
半牛	いりううえうあさうをすまう	
送牛	さきよりの千の徳屋尼やまおのり	
老牛	きりもよりの人のさうのり	
黒梅	於冠里公各歌五を梅	
	黒梅や、毒の潤へのりちん	
	或お青のねは五と梅のぬきん	

能睡	懐ふは、嘆ふともぬううい	
能忘	おとく妻七年かかてあつ	
能捕	鶴のや、龍の涙を伺て	
能取	物さとしきさうはね	
能聴	梨のいろめあとしきん	
能通	花の酒うるを溜さぬ	
能年	ぬう味、うまをかきん	
能治	川を流し、葉をうり	

か減

大小の吟々福十丁世年

大倉をさるくもくもおめをが

其角

格枝序格うくしふ

乾兌坎震離艮坤巽

乾兌坎震離艮坤巽

とららぶらつ羽葉のそくはる尾ふ

嵐雪

夏畑し折くくくくくくく

切味等のひささの葉と也

そのりくくくくくくくくく

馬茶碗ありまの朝とまきく

茶碗銘

雑六十四

そのりくくくくくくくくく

香のやまをたふらう園のぬき

鼻をかきくくくくくくく

ほらえらうのすくくくくく

槍技 貧僧 大悪 小くくく

のり ちりひ 小や雀 ちん目

乃んくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくく

ねむりのくくくくくく茶碗

田文 ぎとたんとりのちやまのふ田渥 其用

雜 卷五

附録 温故集

ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ
ふまをを返りてさそりてんぬりぬ

權中納言 定家卿
大納言 為世卿
西三條 實澄卿
近衛殿下 信尋公
鳥丸大納言 光廣卿
鳥丸大納言 西武
光廣卿

うねくさおきてわらわら〜の音
 鳥丸大納言 光廣卿
 小回あや〜ひのや〜のあせ
 大閤 季吉公
 乳きと標さう角力44を〜
 八幡太郎源 義家
 頼朝りさ〜の〜川
 右大將源 頼朝卿
 島庄司 重忠
 茶田うら〜川さ〜川
 大閤 秀吉公
 さ〜〜〜の〜
 細川 玄旨法印
 小堀氏 宗甫
 長崎丸屋法門 師宗
 深水三河守入道 宗甫
 宗甫

雜 六十六

後世の〜
 細川 玄旨法印
 よ〜
 羅山子林 道春
 さ〜
 半井 卜養法眼
 改年の〜
 西岸寺 信口上人
 鴨 長明法師
 紫野 一休和尚
 深草 元政上人
 東海寺 澤庵和尚
 紫野 一休和尚
 岸原の釣の〜月

松本堂 昭乗
 高野山 楚仙上人
 紫野 一休和尚
 愚道和尚
 西岸寺 任口上人
 正三位長官 常和
 宗祇法師
 心敬僧都
 牡丹花 肖栢
 宗長法師
 雑六十七

櫻井 基佐
 宗養法師
 救齋法師
 周阿法師
 里村 法橋紹巴
 狩野 常信
 瀬戸藤四郎 春慶
 千利休
 曾呂利 新左衛門
 蜷川新右衛門 親當
 赤芥又のそと常とくむる夕、那

宗鑑、城州山崎妙喜庵に在り
足利義尚、待童に三郎志那彦三郎
と稱す

え新中並代のともおのりも
 之日のさるをのよせん不二の山 山崎 宗鑑
 鳳凰も出よのともさき西の年 松永 貞徳
 極る田の秋またひくや秋は
 本くも 指おき下葉の何ゆれ
古伝宗道成始て先年の時
 さよたふるふ信んり 傷か 九條殿下号致山公 兼孝公
 まさち・ささちたひくもあふ神 貞徳

○中古引

吹ぬ日や梅もよらへてふあはれ
 心をばらようせし懐をいぬ日記 敬雨
 昔よまの林をいへるうみ葉のうた 兎貫
 たんほくのさるうりから中世は 素丸
 あきよ一白らもらん餅くもり 存義
 梅もあはれなれもさるうら月おが 湖十
 ぬまもしうい合さる 蟻の物 盤谷
 山くさるもさるも 園くさる 平砂

山加中し麻のふらむく番 椒
 投らきし角方や砂よねの歌
 風いぬ人の目かやけしるも
 ふらむくことよと懸きしうのち
 昔や山低らしてもぬし
 正月よさらしうなむて人易し
 不ろくことよと懸きしうのち
 数入のこらほきとくしよの宿
 昔こくことや海よむく出計言
 須テ清中烟くもらむて困まらる

樽川 肯原 紀逸 三代 涼帝 竹阿 瓢水 大祇 麦水 風律

る風のらくきひきより初さく
 名月や月よりか又隈もなし
 薄ちる末よぬる者の焼たふま
 ろの落く風のさる四つしるや
 雪つき中けう用さこのうせら
 くらねあむ日さつひくる東山
 おもきやゆきしよさして望月ね
 葉のふや深峰を照るの東山
 肩つこふうもくせりて居る橋いさ
 女ものともなよりけりしる

標良 蓼太 白雄 蝶爰 康工 羅人 巴人 竿秋 吞江 青蘿

藤の葉の吹雪くくく藤のつゆ
 ちるやうは鼻うらなをて仏名舎
 ひらつ虫の灯を中なまきり可也
 け、まきく橋もむせよけりしこま
 卯の何よすこあの子を押しけれ
 蟻蟻やうしめのなまを人まきり
 えをむもまきりまきり山はくつ那
 ちよなるまきり会まきり橙くれ
 藤よりして伏待の月まきりこれ
 訂さくまきり舟の板や木下雲

曉臺 諸九 鳥醉 闌更 富天 一鼠 一音 仙鶴 大魯 風狀 雜七十

友を待傍まきりまきりや夕柳
 舟のまきりまきりまきりまきり
 和まきりまきりまきりまきり
 朝平やまきりまきりまきりまきり
 まきりまきりまきりまきりまきり
 山のまきりまきりまきりまきり
 ねまきりまきりまきりまきりまきり
 一筋もまきりまきりまきりまきり
 朝まきりまきりまきりまきりまきり

舎棹 車蓋 几董 枕山 宗讚 宗屋 佛仙 移竹 也

追加

晴切く富士や天つそり日枝の山
芥又もくくさぬちをふとなくく
号や一日もこのくはれね
ま〜梅やあふもむさひあの外
菘む〜と東山まの枝 ふまに
く中よか〜とた〜あ柳〜
握り〜と粒ふ〜と秋のそ
ふ〜くは〜折せん時々〜

嘯山
二柳
素外
完来
重厚
旧國
長翠
五明

雜七十一

河のこのそま〜もふ〜の鳥
き〜〜と〜と〜と〜と〜と
戸のま〜と我ふ〜と〜と〜と
い〜と〜と〜と〜と〜と
冬〜の〜と〜と〜と〜と
この井やま〜と〜と〜と
田〜と〜と〜と〜と〜と
長さ〜と〜と〜と〜と
そのま〜と〜と〜と〜と
上月や葉の舞ふ〜と〜と

三千彦
竹巢
午心
士朗
夫左
恭昌
都雀
瓦全
石菴
貞雅

けりし梅むきの嵐となりまは
橋けりしなまつれ月あま
おのねまはきとて幸ふも
あまよれきね又けりしひうが
好無中悪知て人を尋ふ
おの市虫養ひとて困なり
むしとてそのれを成はあが
梅垣の跡をさるるにきり
あまよ魚をけりしゆり
あまよけりしけりし極のふきと

喜齋 玉屑 成羨 班施 可都里 方廣 蒼虬 凡坊 月溪 関叟

雜七十三

鴨の泣くもさるるにきり
ちりちりしとせしとてさるる
おのけりしとて成りてけりし
さるる人の中けりし秋のいせ
後の月垣輝とてさるるにきり
堀半とてさるるにきり
漏るる成りしとて幸ふも
さるるをのけりしとてさるる
さのぬまやむしのかさるる
或はけりしとてさるるにきり

春蟻 道立 五来 樗堂 青燈 庶古 尺艾 一州 鐵船 名樂

うらら山を海ぬくうね小おた
 船くくも湖よりうねるうら
 湖を一日出てもるのこり
 日の影のおほるまたりまのき
 初雪のきしめし雪のまじりま
 初日新く雪をこりまのり
 やみりやれゆきとせまはま
 石井の雪よりま入るやこる
 けくまのりまのまよる
 親はくふまの秋秋のまよる

曹隠
 長齋
 羅城
 宰馬
 東瓦
 買明
 木象
 空阿
 石人
 石井

雅七十二

燦々せのまよりうねるうら
 きさるるやま清てゆき秋けが
 うらまのり人路くまのり
 中くふまのりまのり
 路くまのりまのり
 葉のまのりまのり
 まのりまのり
 雪焼くまのり
 橋まのりまのり
 けくまのり

右稻
 若翁
 月化
 宰町
 田禾
 子坤
 梅價
 路人
 布舟
 寄淵

雪の雲のさし傘はたむむ
木の香はあらしうらまゝおき
とほくとおる清らり天の川
かこはらうかよもたぬやゆき
ふりくと柳よまきうらまゝ
ひらきとあかまゝさえて番椒
まるや杖とまらりの肘ひく
里人や雉の和風さしぬら
大橋のおとよまきやまきの雨
笑む免月月の膳のゆきねさるぬ

馬月 百池 宗石 友國 鷺雪 其成 九十 柳遊 丁江 菊明

雜

夕ら帯人のうらうら成なる橋
翠月おふむしうぬらぬまの食
夕の海のゆき越まきさるる餅
南もちりまて月さるるおま
ままのまらうくに笑むはうく
夕まきのゆき柳よりまきさる
秋の世の静よしなす月おま
我者狐牛の白まそまの月
ぬり桶のまきさる雉とあま
まゝ人の物さるうらあま

万和 且く 巢兆 守中 葛三 馬肝 卓池 蕉雨 猿丸 其由

月又や〜無〜人の目よりむ
 嬉捨のくさき中よりほも〜な
 まいとも又〜を〜り 野〜り
 け〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 蜂のふせ〜り〜り〜り〜り〜り
 後の月人未ぬ〜り〜り〜り
 な〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 朝もあや〜り〜り〜り〜り〜り
 ころもあや〜り〜り〜り〜り〜り

西
 一茶
 呂蛤
 北豆
 蜂友
 雄瀏
 騏道
 素雪
 憲仙
 斗入

雜七十五

是〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 な〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 け〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 牡丹咲〜り〜り〜り〜り〜り

泊帆
 平角
 升六
 駝岳

俳諧十家類題集雜之部終

寬政十一年己未五月

京都書林

野田 治兵衛

心齋橋筋博勞町

井筒屋庄兵衛

大坂書林

同 北久太郎町

奈良屋長兵衛

同 唐物町

河内屋喜兵衛

同 北久太郎町

河内屋太助

塩屋忠兵衛



